



文部科学省特定領域研究
「実験社会科学-実験が切り開く 21 世紀の社会科学」総括シンポジウム
2013. 1. 28（月） 9:30～17:30
一橋講堂 中会議場（学術総合センター2 階）

Program & Abstracts
特定領域研究「実験社会科学」の概要と展望 9:30～9:45

西條辰義 大阪大学社会経済研究所、領域代表
社会的ジレンマの解決をめざして：人間性モデルに基づく制度設計 9:45～10:25
西條辰義 大阪大学社会経済研究所

本領域の課題である＜人間性モデルに基づく制度設計＞の視点から社会的ジレンマの解決を目指す制度設計を試みる。非常に単純なメカニズム（承認メカニズム）を用いることにより、社会的ジレンマが理論でも実験でも解消できることを示す。承認メカニズムは人々が利得最大者、互惠者、不平等回避者であっても機能するものの、功利者、利他者が混じると協力を達成できなくなる。ところが、非均衡パスのデータによると、功利者、利他者がほとんどいないことがわかる。さらには、fNIRSによる前頭葉の解析は承認メカニズムを用いると人々が楽に意思決定していることも発見している。さらには、「再考」や「他者の目」の利用でメカニズムそのものが頑健になることも見だしている。

実験でどこまで政治が分かるか 10:25～11:05
肥前洋一 北海道大学大学院経済学研究科

外的妥当性を重視する政治学では、フィールド実験（選挙の案内状を送付するグループと送付しないグループを設けて投票率の差を測るなど）や調査実験（ウェブを利用した質問調査において特定の情報を与えるグループと与えないグループを設けて回答の差を測るなど）は受け入れられているが、（実際の政治の場ではない）実験室に参加者を集めて意思決定をしてもらう実験（さまざまなルールのもとで投票してもらいルールと投票結果の関係を測るなど）に対しては、その有効性に関して見解が一律でない。本報告では、特定領域研究「実験社会科学」政治班で行われてきた実験を例に挙げながら、実験がどの程度まで政治制度や政治行動の理解に貢献しうるかを議論する。

「分配の正義」の認知・神経的基盤を探る：Rawls と不確実性 11:05～11:45
亀田達也 北海道大学大学院文学研究科

John Rawls の『正義論』に代表されるように、「正義」をめぐる論考はこれまで規範論的な立場（～すべし）から行われてきた。そうした規範的論考は人文社会科学に大きなインパクトを及ぼしてきたが、それらの議論が人間行動に関する実証的な知見（～である）とどのように接合されるのかは明らかでない。ここでは、有力な正義原則としての「平等原理」、それと対峙する功利主義的な「効率(efficiency)基準」との深刻な対立が、どのような条件の下でどのように乗り越えられるのかという問いを軸に、Rawls の分配の正義をめぐる議論と、行動科学・脳科学的アプローチとのマッピングを図る。社会的分配に関する選好がリスク下の意思決定における選好と密接に関係する可能性を、行動・認知・脳イメージング実験により検討する。

Beliefs, expectations, and strategies in the cultural niche construction 11:45～12:25

山岸俊男 玉川大学脳科学研究所
Humans think, communicate, and behave to adapt to a particular social ecology (which I call a social niche), and by doing so they collectively create, maintain, and change the ecology they adapt to. A social niche can be analyzed as a **self-sustaining system of shared beliefs**. A set of shared beliefs make it possible for people who understand that the beliefs are shared by others to adjust their behavior to the anticipated responses from others. People who share the same set of beliefs thus induce each other to think and behave in particular ways by behaving in those ways themselves. The best support to this approach is found when cultural differences in cognition and behavior that are regularly observed in everyday life disappears in a **social vacuum** – in a situation in which people are rid of any concerns about implications of their behavior and can express their thoughts and behave free of any social concerns. Examples of such experimental manipulations will be presented and discussed.

ポスターセッション・総括班会議

経済学における実験の役割 13:40～14:20

神取 道宏 東京大学大学院経済学研究科
経済学は伝統的に実験的手法が使えない学問であると思われてきたが、過去 20 年ほどの間にこの常識は覆され、いまや実験は経済学の重要な研究方法の一つとしてその地位を確立した。実験は経済学にさまざまな新しい知見をもたらしたが、実験に対する次のような素朴な期待はどの程度満たされたであろうか。すなわち、実験によって新たな法則性が次々と発見される、あるいは理論の正しさが実験によって確かめられる、という（自然科学の経験から当然出てくる）期待である。この 2 点に着目して自然科学と経済学を対比し、経済学における理論と実験の役割について考察してみたい。

進化生物学からみた社会科学 14:20～15:00

巖佐 庸 九州大学大学院理学研究院
生物のあらゆる側面には適応性が表れる。その理解には、社会科学で発展してきたゲーム理論や制御や設計などの概念が役立ってきた。他方実験手法の導入により、社会科学の基本前提の見直しが進んでいる。私は、進化生物学者の目からみた話題を提供したい。第 1 に、ヒトも動物の 1 種であり進化の産物であるが、道徳性の考慮がいたるところにみられるなど他の生物にはない特徴がある。その理解に間接互惠の役割を考えたい。第 2 に、ゲーム理論は、これまで均衡概念に集中してきた。エージェントの適応性の仮定をゆるめることによって、より幅広いダイナミックな現象が扱えるのではないか。第 3 に、向社会性の実験的解析から、ヒトが状況に応じて効用関数を切り換えていると見えることがある。この観点の有効性を実験的に見極めることがのぞましい。

自然科学と社会科学における理論と実験の役割 15:00～15:40

甘利俊一 理化学研究所脳科学総合研究センター
ビッグバンに始まる宇宙は、物質とエネルギーを主役とする物理法則にもとづいて発展した。ある時期に生命体が生じ、物質の上に情報を表現する生命の法則が生まれた。進化的法則もその一つで、脳を持つ人間が誕生する。人は心を持ち、社会を作り文明が生じた。社会の法則、文明の法則は独自の発展の原理を持っている。生命科学は物質の法則の上に、さらに情報の法則が加わるので、物理学・化学の世界とは異なる。社会科学に至っては、人間の脳に起因する人と社会の法則を対象とするからさらに異なる。科学は観察に始まり、整理分類の段階を経て、現象の本質を記述する理論に至る。理論を構築するに当たって、観察に加えて能動的な実験が大きな役割を果たす。社会科学における理論の役割と実験の意義を考えてみたい。

パネルディスカッション「実験社会科学の展望」 16:00～17:20

＜司会＞ 清水和巳 早稲田大学政治経済学術院